

# 泉鏡花「夜叉ヶ池」「海神別荘」について

はじめに

泉鏡花の戯曲「夜叉ヶ池」<sup>〔1〕</sup>では、ふたつの伝説が前提としてあり、これらの伝説を軸に、主人公・晁と百合のストーリーが展開している。

まず〈竜神の伝説〉である。

大昔、人と水が戦ったとき、夜叉ヶ池に封じ込められんとした竜神が、人の溺れるのを救うために自らの自由を奪われるのは仕方ないとしても、自分（竜神）は本来、自由を求め、自在を欲し、気ままを望むから、誓いを忘れればたちまち人畜の生命などものともせず大雨、大嵐を起こして、あたり一帯を水底に葬ってしまうだろう、したがって、日に三度（明六つ〓午前六時頃、暮六つ〓午後六時頃、丑満〓午前二時頃）、鐘を撞くことよって、この誓いを思い出させよ、<sup>〔2〕</sup>と云うのであった。

もうひとつは〈白雪姫の伝説〉である。

齊藤 まどか

生贄として、裸にして牛の背に縛りつけ、夜叉ヶ池まで追い立てるといふ恥辱を与えた。処女・白雪はその無念を牛に託した。牛の背に芝を積んでこれに火をつけ、ふもとの村へと差し向けたのである。たちまち村は燃え、それを見届けて処女・白雪は夜叉ヶ池に身を沈めたという。

作品は、このふたつの伝説をめぐって晁と百合が出会い、結ばれ、死に至る、という物語と、剣が峰の若殿への白雪姫の恋情という霊界の出来事とが、重ね合わされる形を取っているわけだが、この点に関して、「魔圈のできごと」と現世での葛藤とが切り結ばず、劇的迫力を欠いている」といった従来の見解を紹介したうえで、森井マスマシ氏が、次のように述べている。<sup>〔3〕</sup>

（A・I）〈晁・白雪〉対〈村人〉といった構図の中で、百合は「けつして前者に身を置いてるわけではない。たとえば「雨乞の犠牲」の場面において、百合を連れて村を去ろうとした晁に対して、「その婦は村のものだ」といった村人のことばに、百合が思いとどまったのはそのためである。（中略）

また、

テクストの中心人物である百合が、村人との関係に拘束されて、「伝説」という「聖なるもの」に対して、決定的な力をもちえないという制約は、テクストの展開を大きく左右している。たとえば白雪のせりふに、「え、煩いな、お前たち。義理も仁義も心得て、長生きしたくば勝手によし。……生命のために恋は棄てない」というものがある。ここで「義理」とはまさに鐘の約束であり、鏡花のテクストに繰り返しあらわれる「義理」と「恋」の二者択一が、(中略)(A・2)「夜叉ヶ池」の場合、「恋」が「義理」に優先されることはなく、白雪が恋人を思う心を抑制し、夜叉ヶ池にとどまることを納得してしまふ(中略)つまりテクストの中心にある鐘の約束そのものが、白雪を夜叉ヶ池にとどまるよう強いるものであり、地縁という「義理」によって、恋が制約を受ける構造は、百合のみならず魔界に在るはずの白雪をも律しているのである。

「夜叉ヶ池」において、カタルシスは迂回されている。しかしその原因は、「魔圏のできごとと現世での葛藤」が「切り結」んでいないからではなく、「現世」の論理が「魔界」の論理を屈服させてしまっているからである。その結果「劇

また、

「現世」の葛藤が、「現世」の論理に帰着し、恋の成就が宙づりにされている点が、「夜叉ヶ池」というテクストの特徴である。これによってテクストは、新たな伝説を生み出していくのであり、そこには「現代」人の精神的な荒唐がありありと描かれている。

テクストにおいて、〈晁・白雪〉対〈村人(百合も含む)〉といった構図が刷新されるのは、最後の場面においてである。百合の自死を受けて、晁は丑満の鐘を撞くのをやめる。それによって村は大波に襲われるのだが、このとき「万年姥、諸眷属」が、村人を「一人も余さず尽く屠り殺」そうとする一方で、部外者である学円は、鐘楼に登って水を逃れ生き延びる。このようにラストシーンでは、村人と部外者は生死によって峻別され、晁と百合は新たな命を得て、水底の住人として生まれ変わる。つまりこの洪水は、村人と部外者を分けると同時に、晁と百合を隔っていた村人と部外者の境界を無化するものであり、これによって二人の恋は、現世から異界へと位相を変えてついに成就されるのである。「夜叉ヶ池」において鏡花は、「伝説を単に「幻想劇」として語るのではな

く、(C) 伝説の破棄を主題として伝説が通用しない時代、すなわち近代に対する批判を示しながら、新たな伝説をそこに描いて見せたのだといえる。(傍線および記号は引用者)

すなわち、「夜叉ヶ池」において、(A) 百合ないし白雪は、伝説・地縁・「義理」(すなわち「晁・白雪」対「村人」といった構図)の制約を受けている。(B)「魔圈」と「現世」の葛藤が「切り結」んでいないどころか、葛藤は「現世の論理」に帰着し、「恋の成就が宙づりにされて」いる。(C)「伝説の破棄」、「伝説の通用しない時代」、「近代に対する批判」が示されている、というのが森井氏の主張である。

しかし筆者はこれに異論を唱えたい。筆者には、この作品が、「恋が制約を受け」ていたり、「恋の成就が宙づりにされてい」たりしているようにはみえない。また、「伝説の破棄」や「近代に対する批判」が主題というのは論外というべきで、上記ふたつの伝説こそが、晁と百合の恋をめぐりに成就させた、と主張する。また、「夜叉ヶ池」のおよそ九ヶ月後に発表された戯曲「海神別荘」<sup>(4)</sup>との関連についても触れ、そこから得られる見解を示したい。

## 1

まず、晁と百合の様子および恋模様について。

晁 (中略) お勝手働き御苦勞、せつかくのお手を水仕事で  
台なしは恐多い、些とお手伝ひと行かうかな。

百合 可うございますよ。

晁 否……お手伝ひと云ふ処だが、お百合さんの然うした処  
は、咲残つた菖蒲を透いて、水に影が映したやうで尚ほ綺麗だ。

百合 存じません。

晁 誉めるに怒る奴がありますか。

百合 おなぶり遊ばすんでございますものを。

冒頭、米を磨いでいる百合の姿を晁が誉めているシーンである。晁は百合の手荒れを心配し、手伝いを申し出る。ここから、晁の百合への想いがうかがえる。また、百合は誉められたのをからかいだと思ひ怒っているが、このことから、晁が百合を誉めるのは、珍しいことではないということがわかる。続く左のシーンでは、お互いの身体を気遣う、晁と百合の仲の良さが見て取れる。

百合 ……其の竜が棲む、夜叉ヶ池からお池の水が続くと申

します。此処の清水も気の故やら、流が沢山瘦せました。頃日は村方で大騒ぎをして居ます。……暑さは強し……貴方、お身体に触りはしますまいかと、——めしあがりもの不自由な片山里は心細い。私は其が心配でなりません。

晃 流が細つたつて構ふものか。お前こそ、其の上夏瘦せをしないが可い。お百合さん、其の夕顔の花に、一寸手を触つて見ないか。

百合 はい、怎ういたすのでございますか。

晃 花にも葉にも露があらうね。

百合 あゝ冷い。水の手にも涼しいほど、しつとり花が濡れましたよ。

晃 世間の人には金が要らう、田地も要らう、雨もなければなるまいが、我々二人活きるには、百日照つても乾きはしない。其の、露があれば沢山なんだ。

作品の冒頭で晃が「水は、美しい。何時見ても……美しいな。」と言つていた、その清水と、その流れに寄り添つて米を磨ぐ百合、そして「二三輪小さき花」を咲かせる菖蒲とは、一体となつて、ふたりの愛と美の生活を象つている。晃と百合には、「金」「田地」「雨」は要らない、「百日照つても乾きはしない」露、すなわち枯れることのない愛があれば、それで十分なのだ。

このあと、晃の友人である学円がやつてきて、百合に、晃が行

方知れずとなつた話をする。そこで百合は、学円が晃を東京に連れ去つてしまうことを恐れ、晃と学円が再会する前に学円を帰らせようとする。ところがそこに晃が登場、学円に向かつて「山沢、（ときつぱり呼ぶ）」、つまり自分が萩原晃であることをみずから明かすのである。百合は晃に「あれ、貴方。（と走り寄つて、出足を留めるやうに、膝を突き手に晃の胸を圧へる。）」、そして晃と学円の会話を「座に直つた晃の膝に、其のまゝ、俯伏して縋つ」たまま、泣きながら聞く。

このときの百合の様子から、晃と離れては生きていけない、という、晃に対する思いの強さがうかがえるだろう。一方で晃は、「帰りやしない、大丈夫、大丈夫。」と百合をなだめ、帰ろうとするそぶりを一切見せていない。晃もまた、百合と離れる気はまったくないことがわかる。森井氏は「地上」の女でしかない百合の恋情には、「現世」の論理におびやかされた、脆弱」さがある、とし、このシーンをその例に挙げているのだが、しかし、「地上」の女であり、「地上」の男であるにすぎない百合と晃が、「現世」の論理を意識しつつも、互いに強く求め合つている、この姿に対して、どうして「脆弱」と非難する謂れがあるのだろうか。

晃にとつて、竜神の伝説を信じようとする村人たちのことはどうでもよかつた。一度は琴弾谷を出て帰ろうとしたが、そこで百合に出会い、「もしや、岩抜け、山津浪、然うでもない、大暴風雨で、村の滅びる事があつたら、打明けた処……他は構はん、

……此の娘の生命もあるまい——待て、二三日、鐘堂を俺が守らう。」と、琴弾谷に残ることを決めたのである。学円に「すると、あの、……お百合さんぢや、其の人のために、こゝに隠れる氣に成つたと云ふのぢや。」と言われ、晃は肯定の意を示している。晃の、百合に対する愛情の非常に強いこと、そしてふたりを結びつけたのが、他ならぬ〈竜神の伝説〉であつたことを確認しておこう。

そもそも、百合が、学円に、茶や梨のお代として「方々旅を遊ばした、面白い、珍しい、お話し」を求めたこと、また、「葉売の衆、行者、巡礼、此の村里の人たちにも、お間に合ふものがござんして、其のお代をと云ふ方には、誰方にも、お話を一条づゝ伺ひます。沢山お聞かせ下さいますと、お泊め申しもするのでござんす。」と説明していたのは、「国々に伝はつた面白い、又異つた、不思議な物語を集めて見たい」という志を立てて旅に出た晃に喜んでもらいたい、そのようにして晃を自分のそばに引き留めたい、という一心からであつたし、また、晃が「昼間は白髪の仮髪を被」つているのは、知り合いに居場所が知られたら連れ帰らされるかもしれないから、晃だとわからないようにしていたのである。「地上」の存在である限りにおいて、世俗的・「現世」の論理に拘束されつつも、それに抗して一緒に暮らすことを続けるふたりが、おのずと竜神との約束をまつとうしようとする生き方を選んでいるのである。

次に、村人たちが百合を攫いに来るシーンを見よう。

「雨乞の犠牲」として連れていかれそうになる百合は、せめて晃が帰るまで待つてほしいと村人たちに懇願するが、強引に牛の背に縛りつけられてしまう。そこへヒーローのように晃が助けに来る。晃が助けるのに間に合つたのは、百合の「守唄の声が聞え」、「しきりに胸騒ぎが」したからである。百合の晃を想う心が、歌のつて晃に届いたのだ。このあと学円が「雨乞の犠牲」の身代わりになると言い出し、晃と百合も互いに庇い合う。やがて村人たちとの決闘になり、混戦になる。ここでも、晃と百合は「互に楯に成らんと争ふ」。そして、混戦のさなか百合が自害すると、晃は鐘を切り、それから百合の後を追つて、彼も死を選ぶのである。

このシーンについて、森井氏は「恋を貫き村を出るといった選択肢が、百合にもなかつたわけではない。しかし地縁を断ち切り、個人の愛を貫く論理が、百合によつて選択されることはなかつた。」と述べている。

しかし百合の意志——彼女が何を「選択」していたか——は、晃の次のせりふに明らかではないだろうか。

何処のものでも差支へん、百合は来たいから一所に来る……留りたければ留るんだ。それ見ろ、萩原に縋つて離れやせん。

(微笑して)置いて行けば百合は死なう……人は、心のまゝに生きねばならない。

百合の「村を出る」という意思が、晃に伝わっていたのは明らかである。

夜叉ヶ池に向かった学円と晃の帰りを願いつつ子守歌を歌う百合について、杉本優氏は、「そこには恋人たちの隠された危機があり、ひたすら信じ願うことでそれを乗りきろうとする百合の純粋な情愛がある。それが、耐え難い恋情ゆえに鐘を切つて落とそうとする白雪の行為の危機を回避させるのである。ひとり晃の帰りを待つ百合の情愛がこのとき両界を貫き、同じくひとり恋に耐えねばならない白雪の心を動かした」と述べている。これに対して森井氏が、「晃に聞かしていえば、そうした危うさはまったく感じられない」と反論している点については同意できる。晃の覚悟の強さは、右に引用した、村人を前に発せられた彼のせりふに明らかだからである。しかし、百合の覚悟に対して森井氏は、次のように述べている。

たしかに晃を待つ心細さに耐えかねて、人形を抱いて子守歌を歌う百合の姿は、白雪の心を動かした。しかしここでいわれている、「恋人たちの隠された危機」とは、もっぱら百合の不安に起因するものであり、(中略)百合にとって村人と

のつながりは、断つことのできないものとして百合を拘束している。そのため百合は、晃と夫婦であるにもかかわらず、村にとつては部外者である晃との絆について、確信をもてず不安を抱えている。このように、百合の晃への思いは、「ひたすら信じ願うことでそれを乗りきろうとする百合の純粋な情愛」というよりも、もつと受け身で弱いものである。

本論で述べてきたように、百合は晃のために旅人等から「国々に伝わった面白い、又異つた、不思議な物語」を聞き集めている。この健気さは、「受け身」とは言えないだろう。また、晃と決して離れたくないという強い気持ちも持っている。だからこそ、晃と学円が夜叉ヶ池へ出かけているあいだ、不安になりつつも晃の帰りを信じて、人形を抱いて歌うのだ。その点で、むしろ杉本氏の論じるとおり、「ひたすら信じ願うことでそれを乗りきろうとする百合の純粋な情愛」は「両界を貫き、白雪の心をも動かしたのである。ここで百合が「乗りきろう」としている「それ」とは、杉本氏のいうところの「恋人たちの隠された危機」などではなく、村人の存在(「村の人が煩いから」とある)、ひいては迫りくる村人たちの襲来という「危機」にすぎない。これによって、晃と百合の存在そのものが脅かされるからだ。しかしこの場面でも、互いを想い守ろうとする晃と百合の絆は固い。

最後の百合の自害について、森井氏は「強い意志を欠くために、

村人に対する責任と晃に対する愛情との、どちらかを選び取ることができなかつた百合は、自らの存在を消すことでそれらふたつながらに選び取るという、アクロバティックな解決をそこに示したのである。」と述べている。

村人たちが百合を捕まえに来たとき、晃が帰るまで待つてほしいと懇願はするものの、「雨乞の犠牲」になることについては拒否する発言を、百合は確かにしていない。しかし晃が帰つてきてからの様子から考察すると、生贄になるまえに晃に一目会いたかつたというよりは、晃なら助けてくれると信じていたようにみえる。先に述べたように、百合が晃とともに村を出るつもりであったことは、晃のせりふから窺えるのであつて、最初から百合には生贄になる気などないのである。

しかし学円と晃が身代わりになるとすると、百合は自分が行くという。これは晃にもいえることだが、百合には晃が傷つくくらいなら自分が犠牲になるという精神がある。村人たちとの決闘になり、晃の身が危ないという状況で、百合は自害した。最後のせりふは「晃さん——御無事で——晃さん。」である。これは、自分がいなくなればこの決闘も意味をなさなくなり、晃も無事でいられるだろうと思つての自害である。つまり、「村人に対する責任と晃に対する愛情との、どちらかを選び取ることができなかつた」のではなく、ただ、ひたすら晃を愛し、その身を気遣う行動であつたといえる。その愛情に、「脆弱さ」や「か弱」さは、み

じんも感じられない。その献身的で優しい性格ゆえに、「雨乞の犠牲」になる気などない、自分は村を出る」と言い張ることを、百合は確かにしてはいるが、しかし、語らずとも、百合の行動には晃への愛が大いにあらわれている。

これまで説明してきたように、森井氏の言う「晃・白雪」対「村人」といつた構図に従えば、百合はあきらかに前者に含まれる。さらに、『その婦は村のものだ』といった村人のことばに、百合が思いとどまつた「様子（A・I）は見受けられない。繰り返しの愛情を抱いているのであり、百合の言動が、「村人との関係に拘束されて」いるかのように見えるのは、彼女の身体が「地上」の存在である限りにおいてである。その心は、微塵も拘束されてないないのである。

## 2

「夜叉ヶ池」における恋愛について、今度は白雪の側面から考察する。百合が白雪の心を動かすことができたのは、何故か。

白雪の恋模様について、白雪の眷属のうちのひとりである鯉七が、「姫様は、それ、御縁者、白山の剣ヶ峰千蛇ヶ池の若旦那にあこがれて、恋し、恋しと、其ばかり思詰めてましますもの、人間の早なんぞ構つて居る暇があるものかッてい。」とほかの眷属

に説明している。

また、白雪自身のせりふについてもいくつか引用してみる。

「人の生命の何う成らうと、其を私を知る事か！……恋には我身の生命も要らぬ。……姥、堪忍して行かしておくれ。」

「あこがれ慕ふ心には、冥土の閔を据ゑたとて、夜のおくるのも待たれうか。」

「義理や旋は、人間の勝手づく、我と我が身をいましめの縄よ。……鬼、畜生、夜叉、悪鬼、毒蛇と言はるゝ私が身に、袖とて、袂とて、恋路を塞いで、遮る雲の一重もない！……先祖は先祖よ、親は親、お約束なり、盟誓なり、それは都合で遊ばした。人間とても年が経てば、ないがしろにする約束を、一呼吸早く私が破るに、何に憚る事がある！ あゝ、恋しい人のふみを抱いて、私は心も悩乱した、姥、許して！」

「……生命のために恋は棄てない。」

「諸神、諸仏は知らぬ事、天の御罰を蒙つても、白雪の身よ、朝日影に、情の水に溶くるは嬉しい。五体は粉に砕けようと、八裂にされようと、恋しい人を血に染めて、燃えあこがるゝ魂は、幽な螢の光と成つても、劍ヶ峰へ飛ばいで置かうか。」

以上のせりふからわかるように、白雪もまた、人間との誓いを破つてでもどうしても会いに行きたいというほどに、千蛇ヶ池の公達に強い想いを寄せている。万年姥がどれだけなだめても、白雪はいうことを聞こうとすらしめない。しかし、百合の歌声ひとつ

で、白雪は感情を落ち着かせることができた。一体なぜそれほどまでに百合の歌声に説得力があつたのか。

杉本氏の論のとおり、「ひとり晁の帰りを待つ百合の情愛がこのとき両界を貫き、同じくひとり恋に耐えねばならない白雪の心を動かした」ということもあるだろう。白雪が百合の寂しさに共感したのである。しかし、別のもっと大きな理由があるのでないか。それは、白雪が、百合のことを「美しい人」といつていることである。一体、百合の何が美しいのか。

村一番の美女であることのほかに、伝説を信じていること、恋をしていること、のふたつが挙げられると考える。

まず伝説を信じていることについて。

「竜神の伝説」は、白雪にとつては言うまでもなく「いましめの縄」である。しかし、「人間とても年が経てば、ないがしろにする約束」と白雪は言い、万年姥も「今の世は仏の末法、聖の澆季、盟誓も約束も最早や忘れてお居ります」と言っている。白雪にとつて「いましめの縄」でありながらも長い間守つてきた約束を、忘れてないがしろにしている村人たちは、白雪からしてみれば不誠実そのものであり、「人の生命の何う成らうと、其を私を知る事か！」と思うことなのである。村人たちは醜い。だが、その中にあつて、伝説を信じ、約束を守り続けようとする晁および百合の行動は、たとえそれが白雪を縛ることになろうと、誠実で美しいことなのだといえる。これは、森井氏の言う、白雪が地縁・義



理」に拘束されているという事態（A・2）とは、異なる。拘束されているのではない。地縁的「義理」が廃れ、腐臭を放っている最中にも猶、晃と百合が、誠実の徳を体現している、その晃と百合の姿に、白雪は心動かされ、「美しい人」と呼んでいるのだ。次に、恋について。

晃、百合、白雪のそれぞれの恋情には、共通点がある。それは、愛を自分の生命よりも優位に考えているということだ。

晃は、村人との争いのなかで、「生命に掛けても女房は売らん」「神にも仏にも恋は売らん」と言っている。白雪のせりふにも、「恋には我身の生命も要らぬ」「生命のために恋は棄てない」というものがある。百合に関しては、せりふではないが、「I」で述べたとおり、晃の無事のために、争いの原因となっている自らの身体、その命を、断った。つまり三人とも、何よりも相手を想う心が行動の軸になっているのである。白雪の美意識はこうしたところに影響されている。

このように、百合という人間は白雪にとって美しい。白雪のせりふに「恋しい人と分れて居る時、うたを唄へば紛れるものかえ」「人形抱いて、私も唄はう」とあることから、寂しさに耐える百合に共感したことも事実だが、しかし、より重要なのは、「思ひせまつて、つい忘れた。……私が此の村を沈めたら、美しい人の生命もあるまい。鐘を撞けば仇だけれども、（と石段を静に下りつゝ）此家の二人は、嫉しいが、羨しい。姥、おとなしうして、

あやからうな。」というせりふなのである。このせりふから考えると、「美しいお百合さんが晃の帰りを寂しそうに待っているから私も耐えてみせよう」、あるいは、「お互いを強く想い合っているふたりが羨ましい、このふたりにはしあわせに生きていてほしい」という気持ちから、鐘を壊すのをやめたのだと解釈できよう。百合の、寂しさを紛らわす歌声は、白雪を説得すること自体よりも、恋人への熱い思いを白雪に思い出させるための、トリガーの役割を果たしているのであると考えられる。

また、この白雪の、晃と百合に対する気持ちは、物語のラストシーンにも大きく関わっている。百合が自害し、晃が鐘を切り落とすと、白雪は思いのままに行動を起こす。学門を除き、村人たちは、万年姥や眷属たちに、「一人も余さず尽く屠り殺」される。ここで、晃と百合のふたりだけは、白雪のはからいによって、「新しい鐘ヶ淵」の住人として生まれ変わることができた。白雪はなぜ、晃と百合を、水底の妖怪に生まれ変わらせることで救ったのか。その理由も、鐘を壊すのをやめたときと同じように、「晃と百合にはしあわせに生きていてほしい」という気持ちはあったからである。

「I」で説明したように、晃と百合は、竜神との約束を誠実に守りながら、互いに大きな愛情を抱き、仲睦まじく暮らしている。それは、自身も同じく身を焦がす恋をしている白雪にとって、美しく、理想のものであった。だからこそ、白雪は、百合に心を動

かされたのだ。

さて、ここでまた、「はじめに」で引用した森井氏の論(B)に反論したい。「夜叉ヶ池」において、「地縁という『義理』によって、恋が制約を受ける構造」は、ないといつてよい

たしかに、白雪が千蛇ヶ池の公達に会いに行けない直接の原因は、「義理」、すなわち人間との「鐘の約束」である。しかし、もし晁と百合がいなければ、あるいは晁と百合が恋をしていなかったら、白雪は思いとどまることなく、村を見捨て、剣ヶ峰へ行っていたであろうことは、先に引用した通りである。白雪が「夜叉ヶ池にとどまることを納得し」たのは、「義理」を重んじたからではなく、晁と百合の美しい「恋」に共感し、ふたりを応援しようと思ったからである。すなわち、主としてストーリーを動かしているのは、白雪の自由な乙女心なのである。

また、水底の妖怪として生まれ変わったあとも、晁と百合の関係は今までどおり比翼連理であろう。晁と百合の恋は、最初から最後までしつかり結ばれているのである。

ところで、百合の美しきの理由のひとつに、伝説を信じていることを挙げたが、そもそも「夜叉ヶ池」という作品は、それまで鏡花が見聞きしてきたであろう複数の伝説によつて構成されている。「はじめに」で説明した、「夜叉ヶ池」のストーリーの軸となるふたつの伝説も、実際の伝説が元になっているのである。<sup>6)</sup>

それらの伝説は、晁と百合の恋愛を手助けしている。ふたりが出会い、ともに暮らすようになったきっかけは、夜叉ヶ池に〈鬼神の伝説〉があつたからである。そして、ふたりが鐘ヶ淵で(死後に、ではあるけれども。この点は「海神別荘」の主題に関わる)あらためてしあわせになることができたのも、〈白雪姫の伝説〉のおかげである。晁と百合だけでなく、白雪の恋もまた、伝説によつて叶つたのである。「はじめに」で引用した森井氏の論に私が付した傍線部(C)にいう、「夜叉ヶ池」における「伝説の破棄」という解釈は、成り立ちえない。むしろ、伝説があるからこそ、ふたつの恋は開花し、かつ成就したのである。晁が鐘を撞くことをやめたのは、「伝説の破棄」ではない。

眼前で、百合が息絶えたのを見定め、晁はいう。

晁 一人は遣らん！ 茨の道は負つて通る。冥途で待てよ。  
(と立直る。お百合を抱ける、学円と面を見合せ) 何時だ。  
と極めて冷静に聞く。

学円 (沈着に時計を透かして) 二時三分。

晁 む、夜毎に見れば星でも了る……丁ど丑満……然うだらう。(と昂然として鐘を凝視し) 山沢、僕は此の鐘を搦くまいと思ふ。何うだ。

学円 (沈思の後) うむ、打つな、お百合さんのために、打つな。  
晁 (鐘を上げ、はた、と切る。暈と撞木落つ。)

途端にももの凄き響きあり。

「約束が破られたらどのような破局が村を襲うか」を完璧に熟知した上で、伝説上の約束事に則つて、晃の行為は決定されている。「極めて冷静に」、「沈着に」、「鐘を凝視し」、「沈思の後」、晃と学円のせりふに添えられた卜書きは、いずれも二人の行為が熟慮の末のものであることを示している。すべては生きた伝説のルールの下での話としてのみ、晃の行為は理解しうるのである。

## 3

白雪のおかげで、晃と百合は妖怪として生まれ変わり、水底で暮らすことになる。その水底とは一体どのようなところなのかについては、「夜叉ヶ池」が発表されたその九か月後に出た「海神別荘」の読解によつて明らかにされるだろう。筆者はこの作品を、「夜叉ヶ池」の続編、あるいはその注釈的性格をもつた作品とみなす。

「海神別荘」では、海底世界の公子とそこへ興入れにやつてきた美女が最終的に結ばれるが、そのストーリーにいわゆる恋愛的要素はほぼない。人間界と海底世界とは価値観がまったく異なり、美女はただ、海底世界のすばらしさを理解することで公子と

結ばれるからである。本文より、海底世界の価値観がよく表れているせりふをいくつか紹介する。

公子 引廻しと聞けば、恥を見せるのでせう、苦痛を与へるのであらう。槍で囲み、旗を立て、淡く清く装つた得意の人を馬に乗せて市を練つて、やがて刑場に送つて殺した処で、——殺されるものは平凡に疾病で死するより愉快でせう。——其が何の刑罰に成るのですか。陸と海と、国が違ひ、人情が違つても、まさか、そんな刑罰はあるまいと想ふ。

公子 馬に騎つた女は、殺されても恋が叶ひ、思ひが届いて、嗚本望であらうがね。

公子 其はお七と云ふ娘でせう。私は大すきな女なんです。御覧なさい。何処に当人が歎き悲みなぞしたのですか。人に惜まれ可哀がられて、女それ自身は大満足で、自若として火に焼かれた。得意想ふべしではないのですか。何故其が刑罰なんだね。もし刑罰とすれば、恵の杖、情の鞭だ。實際其の罪を罰しようとするには、其のまゝ、無事に置いて、平凡に愚凶々に生存らへさせて、皺だらけの婆にして、其の娘を終らせるが可いと、私は思ふ。

これらのせりふは、近松門左衛門『大経師昔暦』および、井原西鶴『好色五人女』において、女が刑罰を受けていることに對しての公子の意見である。その考え方は、博士が「其は、すべて海の中にのみ留まりますが」と言っているように、人間界とは異なっている。海底世界でのみ、通用する類いの価値観である。引廻し、獄門の刑に処せられることが「平凡に疾病で死ぬより愉快」!? 火で炙り殺された、その時の「得意想ふべし」!? 寿命をまつとうすることが「罰」!? くこれらの発言は、人間が身体的存在として生きてある、という事実を徹底的に侮蔑している。そんな考えを、呆れるほどあつげらかんと、公子はしゃべりまくっている。

一方また、美女が「誰も知らない命は、生命ではありません。此の宝玉も、此の指環も、人が見ないでは、些とも価値がないのです。」と言つたことに対しては、公子は次のように反論している。

公子 それは不可ん。(卓子を軽く打つて立つ) 貴女は榮耀が見せびらかしたいんだな。そりや不可ん。人は自己、自分で満足させねばならん。人に価値をつけさせて、其に従ふべきものぢやない。(近寄る) 人は自分で活きれば可い、生命を保てば可い。然も愛するものとともに活きれば、少しも不足はなからうと思ふ。宝玉とても其の

通り、手箱に此を蔵すれば、宝玉其のものだけの価値を保つ。人に与ふる時、十倍の光を放つ。唯、人に見せびらかす時、其の艶は黒く成り、其の質は醜く成る。

海底世界では、生きてゐるもの、美しいものについて、誰に認識されなくても、価値はある。対社会的・相対的価値は醜悪さをもたらすだけだ」という考え方。公子は、人間の身体性を侮蔑し、他者性を排除するのである。そして、決定的な発言が、以下である。

公子 我が海は、此の水は、一畝りの波を起して、其の陸を浸す事が出来るんだ。たゞ貴く、美しいものは亡びない。……中にも貴女は美しい。だから、陸の一浦を亡ぼして、こゝへ迎へ取つたのです。亡ぼす力のあるものが、亡びないものを迎へ入れて、且つ愛し且つ守護するのです。貴女は、喜ばねば不可い、嬉しがらなければならぬ、悲んでは成りません。

公子 獄屋ではない、大自由、大自在な領分だ。歎くもの悲むものは無論の事、僅少の憂あり、不平あるものさへ一日も一個たりとも国に置かない。

「亡ぼす力のあるもの」が、貴く美しいものを愛し、守る——これは、「夜叉ヶ池」で全村を飲み込み、かつ晁と百合を救済した、あの洪水の力に他ならない。そして洪水の威力は、いうまでもなく伝説の力に由来する。つまり「海神別荘」の公子とは、実は「夜叉ヶ池」の世界を主宰していた、あの伝説の擬人化された存在だったのである。

この作品について、西尾元伸氏が次のように述べている。

『海神別荘』という作品は、美女と公子の「此処は極楽でございませうか」、「そんな処と一所にされて堪るものか。おい、女の行く極楽に男は居らんぞ。(略)男の行く極楽に女は居ない」という会話で終わる。海中の御殿は、人間の考える「極楽」とはまったく異なる場所ということになる。公子は作品の途中、「水晶の数珠」が話題になった場面で、「陸」の人間が美女の行く先を「冥土」と考えていたことに反感を覚えていた。公子らにとつて海の中は死後の世界ではなく現に「活きている」世界である。当然のように男女の愛もあるという。美女はそこで、〈悲しみ〉の感情を忘れて生きていく。美女とともに「燈籠」の火が描かれ続けることに注目すれば、『海神別荘』は、「陸」での美女の葬送を、海中の異世界への《再生》へと転換する作品と言つてもよからう。

公子は自分の世界を「極楽」や「冥途」、つまり死後の世界と見なされることを嫌う。彼の言を真に受ければ、『海神別荘』は、「陸」での美女の葬送を、海中の異世界への《再生》へと転換する作品であろう。しかし《再生》された、その「生」には、身体性も、他者とのどんな関りも許されていない。ゆえにそこには時間がない。『好色五人娘』で処刑された八百屋お七は、公子の姉である乙姫に引き取られ、今も十七歳の姿で変わらず生存している。美しいものは、変わらずに美しいままでいられるということになる。寶石のように……。公子の独演会に等しいこの作品の主張を要約すれば、以上のようになる。

晁と百合は水底の妖怪として《再生》した。すなわち、生まれ変わる前の美しさはそのままに、ふたりの恋愛は永遠のものとなり、少しの憂いもない理想郷で、末永くしあわせに、愛を育んでいくのである。

「夜叉ヶ池」のストーリーのみでも、晁と百合がしあわせな結末を迎えていることはあきらかである。そこに「海神別荘」の解積を加えると、晁と百合のその後の「生」(と、そう呼んで、本当に良いのだろうか?)の内実、幸福の本質を思い描くことができるのだ。

おわりに

本稿では、「夜叉ヶ池」の主題は「晃と百合の恋物語」であることの根拠を示すべく論を展開してきた。「はじめに」で記したように、「夜叉ヶ池」は「魔界のできごと」と現世での葛藤とが切り結ばず、劇的迫力を削いでいる」という指摘をされてきたが、しかし、「夜叉ヶ池」の魅力は、そのものさしでははかれない。

「魔界は美しい。

そして、伝説を信じる心も、恋しい人を想う心も、みな美しい。そんなすてきなふたりと、わたしは一緒にしあわせになりたいよ。

だから水底へおいで。”

——白雪の立場からみれば、「夜叉ヶ池」とはそういう物語である。最後の白雪の「お百合さん、お百合さん、一所に唄をうたいませうね。」というせりふは、白雪自身と千蛇ヶ池の公達の恋および、晃と百合の恋、どちらとも幸福でいられることが確信されている言葉である。ラストシーンの、水底での晃と百合の様子から、白雪の願うとおりになったことがわかる。そして、白雪と千蛇ヶ池の公達もぎつと蜜月を過ごすのだろう。命よりも大切な恋は、宝石の輝きを得て、時間の彼方に放たれる。鏡花は「夜叉ヶ池」という作品に、そのような至上の恋愛観を描き出したのである。

そして、海底世界の美しき、素晴らしきを描いた「海神別荘」という作品によって、「夜叉ヶ池」の物語結末部の本質が解き明かされている。「人は、心のまゝに生きねばならない」と言っていた晃は、何よりも自由を尊ぶ水底の世界で、愛する百合といつまでもともに「生き続けるだろう」。——だが、鏡花の価値観にもとづく二人のこの「生」に、読者は憧れるべきか、あるいは目を背けるべきだろうか。先行研究に抗して「夜叉ヶ池」における恋の強度の卓越性を主張した本稿は、「海神別荘」を媒介することで、この問い、すなわち恋の強度の卓越の、その内実に対する疑念を抱きうる地点によりやくたどり着いた、といえよう。

※「夜叉ヶ池」および「海神別荘」の本文は、『鏡花小説・戯曲選 第十一卷』（岩波書店、昭五十七・一）による。引用に当たって、漢字を新字体に改め、ルビを省いた。

注

(1) 「夜叉ヶ池」の初出は「演芸倶楽部」(大二・三)。

(2) 笠原伸夫「天守物語」の成立」(『国文学 解釈と鑑賞』昭五〇・九)。

(3) 森井マサミ「夜叉ヶ池」再読」(『論集 泉鏡花 第五集』和泉書院、平二三・九)。以下、森井氏の引用はすべてここか

らのもの。

(4) 「海神別荘」の初出は「中央公論」(大二・十二)。

(5) 杉本優「泉鏡花の幻想劇——「夜叉ヶ池」の復権」(『国語と国文学』昭五六・八)。以下、杉本氏の引用はすべてここからのもの。

(6) この点については、小林輝治「「夜叉ヶ池」考」(『北陸大学紀要』昭五三・三)によって精査されている。

(7) 西尾元伸「泉鏡花『海神別荘』考」(『舞台演出』)に注目して(『待兼山論叢』平二三)。

〈さいとうまどか／二〇二二年日本語・日本文学科卒〉

## 第一〇四号 目次

二〇二二年六月

京都大学人文科学研究所蔵『天地瑞祥志』

第十二翻刻・校注(二)——「正月朔旦候風」「五音風」——

水口幹記

学人露伴(三)——仏教・その二——

関谷博

クリシタン資料における「あい(愛)」について

漆崎正人

オノマトベ試論——慣習と創造の狭間で——

揚妻祐樹

三遊亭円朝速記本における尊敬語について

青木杏佳

——明治新語使用の意味とは?——

一冊 五〇〇円

二〇二〇年度 日本語・日本文学科 卒業研究題目一覧